

在宅医療連携拠点事業成果報告

拠点事業者名：医療法人財団夕張希望の杜 夕張市立診療所

1 地域の在宅医療・介護が抱える課題と拠点の取り組みについて

・医療・介護の間に壁があり、情報共有・協力体制がとれない。

① 「医療・介護の協力体制の構築」

医療サイドとして介護支援専門員の業務における課題が把握できていなかったため、グループワークを行うことにより困難な事例の対応策、医療の協力の必要性などを共有することに繋がった。

② 「医療・介護間の情報システムの構築」

医療・介護間での情報共有システムがなく、電話やファックスで最低限の情報の交換はあったが、週1回定期的にケアカンファレンスを開催したことやICTツールの活用により、リアルタイムでの情報収集が可能になった。

2 拠点事業の立ち上げについて

・職員の人数が少ないため、資格を持っているスタッフが必然的にメンバーとなる。病院ではないため、MSWが不在の中、常日頃相談担当をしているスタッフがメンバーとなる。

・行政・医師会を訪ね、拠点事業の説明を数回にわたり協力を仰いだ。

・多職種が連携するための立ち上げではあったが、夕張では市街での治療を終えた住民が地元にもどって来やすいように調整する機関でありたいと位置付けた。さらにサービスを受けずに埋もれている住民の発掘のため、診療所内に在宅医療介護連携室を設置し、他の医療機関や介護施設などとの連絡窓口として立ち上げる。

・拠点事業に対する周囲の理解が低く、包括センター

との業務重複と誤解されぬよう、立ち上げとともに介護支援専門員を対象に拠点事業の説明を行った。

3 拠点事業での取り組みについて

(1) 地域の医療・福祉資源の把握及び活用

・地域の資源マップは作成できた。パンフレット作成の段階で、看護師が夕張市福祉課を通し、夕張市福祉・介護人材育成実行委員会に働きかけたが、返事に2か月以上要し、その後も委員会に参加したが、全事業所の協力を得るところまでたどり着かず、計画のみで終了してしまった。

・医師、看護師が他の訪問診療を行っているクリニックと協力し、レスパイトが必要なケースに対しての、介護施設、医療ベッドの提供を行った。

(2) 会議の開催(地域ケア会議等への医療関係者の参加の仲介を含む)。

・合同会議は4回行った。

第1回 在宅拠点事業所としての取り組み
災害発生時に備えた対応策の検討
参加者:介護支援専門員

第2回 介護支援専門員、医療従事者からの事例報告。その後参加者全員によるグループワーク

参加者:医師、歯科医師、薬剤師、隣町の包括支援センター職員、介護支援専門員、医療従事者、介護職員、事務職

第3回 「とよひら・りんく」の活動 西岡病院
「在宅での看取り」かしわのもり家族会
参加者:第2回同様

第4回 事例報告とグループワーク
「在宅ケアのつながる力」秋山正子氏

・在宅ケアカンファレンス

毎週月曜日定期開催

各職種から事例を提示してもらい、参加者全員で検討する。事例検討の対象となる担当の職種にはできる限り参加してもらうようにした。

(3) 研修の実施

・介護セミナー

- ① 介護士対象「ベッド上で快適に生活を送るためのやさしい介助」講義と実習
- ② ケアマネージャー対象「ICTツールの活用について」
- ③ 全職種対象「在宅患者の対応についての事例検討等」グループワーク

その結果、多職種間での連携が深まり、顔の見える関係から考え方の共有に繋がった。

(4) 24時間365日の在宅医療・介護提供体制の構築

・夕張市立診療所は、平成19年より在宅療養支援診療所として活動しており、平成24年度は人口の1%にあたる約100名を超える患者様が在宅医療を受けながら生活している。拠点事業開始と同時に、介護支援専門員との情報共有がスムーズになりつつあり、医療サイドでは気づけなかった介護支援を取り入れることが可能になった。

例えば、独居の高齢者、或いは終末期の患者様には24時間随時対応型訪問看護を利用することにより、ご本人やご家族に安心して生活を送っていただくことに繋がった。

・在宅医療を受ける患者様が增加することにより、夜間・休日の急変に対しても、医療従事者が訪問により対応できるため、救急車の出動回数を減らすことに繋がった。

夕張市の救急車の出動回数

2003年 912件

2010年 473件 (-439件)

訪問患者の緊急訪問数 211件

訪問患者の緊急電話数 259件

合計 (470件)

上記の数字から、在宅医療で24時間体制の医療・介護を提供することにより患者様、介護者様に安心を提供できることに繋がった。

(5) 地域包括支援センター・ケアマネジャーを対象にした支援の実施

- ・拠点事業としての情報や包括センターとしての情報を交換し互いに関わりあい取り組む。
- ・対象となる方の条件に合わせた施設の紹介と情報交換を行う。例えば、独居の方・老老介護の方など緊急でサービスが必要な場合など、できる限り地元での対応ができるよう相談に応じる。

(6) 効率的な情報共有のための取組(地域連携パスの作成の取組、地域の在宅医療・介護関係者の連絡様式・方法の統一など)

・ICTツールを利用し多職種での情報共有を行っている。

- ① サイボウズライブを利用
 - ② 発信元は拠点事業所内の在宅医療介護連携室
 - ③ 当診療所でのかかりつけで、訪問診療・訪問看護のサービスを受けている患者様を対象に関連している担当職種を招待する
 - ③ 招待された担当者は、情報を書き込む
 - ④ 関連担当者はその情報を読むことができる
- 以上の方法により、
- a. リアルタイムで状況を把握できる
 - b. 電話、ファックスなどでの情報開示が速やかに行える
 - c. 医療・介護の分け隔てなく、こまめに情報を発

信することで、週1回のケアカンファレンスの進行がスムーズになった

(7) 地域住民への普及・啓発

- ・平成25年1月19日 市民フォーラム開催
「夕張市立診療所の取り組み」
「在宅ケアの不思議な力」 秋山正子氏
「住み慣れた自宅で母親を看取って」 都築ひろ子氏
「自宅で家族を介護してみて」 菅原もと代氏
約100人の参加者の中で行われた。
参加者の声として、
「もっと早く在宅の取り組みを知りたかった」
「研修の機会を多く持ってほしい」
「在宅医療というものが少しわかった」
などの評価を頂いた。
今後も1年に1回はこのような機会を持ちたい。
- ・診療所ニュースの作成
1回/月発行される、夕張市の広報誌の中に折込みとし作成している。
拠点事業の活動内容、市民の声などを頂きながら普及啓発に繋げた。
- ・出張「暮らしの保健室」開設
1回/週 老人福祉会館で、入浴に来られる方、サークル活動に来られる方に対し 健康相談を行い、必要により医療・介護サービスに繋げる。
- ・民生委員に対する、診療所の取り組みや拠点事業の説明。

(8) 災害発生時の対応策

- ・在宅医療を受けている患者様の情報を消防に渡し、災害時の協力を得る。
- ・在宅専用の担架・AED 購入
- ・在宅酸素を利用している方への災害時の取り組みの講習会を行った

4 特に独創的だと思う取り組み

- ・「北海道在宅医療連携拠点事業連絡会」
北海道保健福祉部医療政策局医療薬務課、北海道における本事業採択機関担当者間で連絡会を開催した。(平成24年6月14日)
その後メーリングを作成し、意見交換や情報共有を行った。

5 地域の在宅医療・介護連携に最も効果があった取り組み

- ・定期的に合同会議やカンファレンス、研修会を行うことで多職種が実際に顔の見える機会が増え、コミュニケーションが取りやすく、情報提供しやすくなった。
- ・多職種連携の中で、行政・包括センターの協力が難しい中、こちらから常に発信し、何度も足を運ぶことにより、合同会議の中で事例発表者まで引き受けてくださり、ブロック発表の際も福祉課から主幹が来てくださっていた。これ以降、包括センターのケアマネからの問い合わせや相談が多くなり、医療のバックベッド及び施設の情報が提供できるようになった。
- ・市外の医療機関から、治療を終えて夕張に戻ってくる件数が増加した。
- ・ニーズに合わせた医療・介護・福祉のサービスの提供がしやすくなった。

6 苦労した点、うまくいかなかった点

- ・開設直後からだが、医師会との連携がうまく取れず、患者様の情報共有、バックベッドの共有、一人診療体制のクリニックに対する協力が困難だった。さらに行政とも連携がうまく取れず、事業を進めることに多くの時間を要した。
- ・同じ北海道内でも、他の拠点事業所とは地域、条件が違うため取り組みが異なることが多々あった。財政破綻し、医師会・行政とも良好な関係が持ていない中で、どこまでできるのか、何ができるのかと模索し時間をかけながら進めていった。

7 これから在宅医療・介護連携に取り組む拠点に対するアドバイス

- 人員の確保により安心・安定の事業に繋がる。
- 医療サイドが、医師との調整役になると、介護の職種に対しても入り方がスムーズである。
- 退院時カンファレンスでの退院調整の必要性(病院の医師に在宅や連携について理解していただく)

8 最後に

- この1年間拠点時事業所として取り組ませていただき、在宅医療が推進されている今、医療と介護は切り離すことができないものであるということを教えられた。現在夕張は、高齢化率45.6%。独居率も高く地元の施設には入れず、行き場のない高齢者が増加すると思われる。そのための受け皿となりえるものを今後考えていきたい。